

ただ今



415 人目

「水をかく手を大きく、大きく回して。そうそう、いいね」高岡郡四万十町本堂にある四万十町窪川B&G海洋センターの屋内温水プールで、子どもたちに優しく手ほどきする「お兄さん」がいた。センター職員の本木大己さん(23)。細みの体に均整の取れた肉付きはいかにも競泳選手っぽい。実は昨年1月に水泳を始めたばかりだ。「競技歴で言えば、この子たちの方が先輩なんですよね」。広い肩幅をすくめ、笑った。



元々は、サッカー少年。幡多郡黒潮町の入野小学校1年生の時、地元の「大方FC」に入団し、大方中3年時に、中盤の要として県中学選手権の準優勝に貢献した。県内外の高校から声が掛かる注目選手だった。選んだのは、憧れた大方FCの先輩が進んだ須崎市の明德義塾高。全国から集まった30人のライバルとしのぎを削りながら、2年でレギュラーの一角



好きな言葉

「頑張る喜び」伝えたい

水泳インストラクター

ふくもと 福本

たいき 大己さん

(23)

黒潮町下田の口



笑顔をやさず、丁寧に子どもたちを指導する福本大己さん(5月、四万十町本堂の四万十町窪川B&G海洋センター)

をつかんだ。3年のときには、インターハイと全国高校選手権に出場したが、ともに優勝候補に0-2で負けた。夢の「全国制覇」はかなわなかった。チームメイトが大学で競技を続ける中、大阪市内の公務員専門学校へ進んだ。「なぜか、燃え尽きてしまった」。競技に打ち込

んできた反動か、2年間「遊ぶ」で済んだという。帰高して目指した消防士は試験をパスできず、四万十市の臨時職員として働いていた時、センターの職員募集を知る。「やっぱり、自分は体を動かす仕事がいいんだな」。再び「スポーツ」に火が付いた。

2015年1月に入社。センターでは「水泳の指導」が必須だった。「小中高の授業をやったくらい」だったが、「教える以上、4泳法できるようにならないと、子どもに対して説得力がない」。先輩職員の補助につく傍ら、自由形、平泳ぎ、背泳ぎ、バタフライをこつこつと練習



し、半年後にはジュニアコースを任せられるまでになった。「呼吸の時は、手と首をくっつけて」「もう少し強く水を蹴れば、速くなるよ」息継ぎを失敗しても、キックができなくても、根気強く、繰り返して声を掛ける。モットーは「褒めて伸ばす」。サッカーを続ける中、怒られてプレーに影響するくらい引きずったり、競技を断念したりする人を見てきたからだ。「せつかく出合った水泳を、嫌いになつてほしくないですから」

サッカーを離れて5年。高校時代の敗戦をよく思い出す。「今にして思えば、練習にも生活にも甘さがあつたと思う。もっとやれたんじゃないかって、少し後悔もあるんです」

だからこそ、子どもたちには「今を楽しもう」と呼び掛ける。その瞬間、瞬間、全力で打ち込んだ先に、喜びがあるはずだと。努力は必ず、その後の人生に生きてくる。サッカーに公務員試験…。苦い経験を経た後、打ち込めるものを見つけた今だからこそ言える教訓だ。

「いつか教え子を日本一」という遠い夢を掲げつつ、今の目標は「先輩に負けない指導者に」。インストラクターとしての独り立ちを目指し、B&G海洋センターが定めた資格を取得するため、6月いっぱいには沖縄県で研修する。救助方法も含め、学ぶことは幅広い。

「命を預かる責任の重い仕事。きつと合格してみせます」

写真・久保俊典
文・横田幸成